

## 愛讀の一雫

横濱 至 樂 生

△『みづゑ』讀者諸君をして、繪畫上其精神と技術を向上せしむる所以の一は、『みづゑ』自身の眞價はさて置き、眞に大下先生の人格に依るべき事と、生は轉た感慨に堪へず候、先生の繪畫は或は他畫伯に依りても求め得らるべし、然れ共人格は他に求め得られざる事を、生は大聲して憚らざるなり。

△されど生は時今諸君中『みづゑ』紙數の少なきを啣ち、繪畫のより多數ならん事を願ふ者有之候に付、或は諸君が『みづゑ』の主志に反したる眼を以て是を視るの愚をせらるにあらざやと思ひ、憂慮に堪へず候、是れ即ち生が一言已むを得ざる所以也。

△畢意何等の思慮もなく、無我夢中に此誌を通覽通讀するは『みづゑ』にとりて甚だ迷惑千萬なるべくと存じ候、於茲生は諸君に眼を以て讀まず、頭を以て讀まれ度く、又此小冊子を一貫して讀まれ度く、希望に堪へず候、されば從て陣腐なる投書も減ずるなるべく、愚問も其跡を絶つべきこと確信致し候。

△勿論理想の圈套よりせば、『みづゑ』は或は完全を期し難きも、是れに不足を唱へ候は、自己の見界の狭さきを知らずして、徒に冤を編者に加ふるに過ぎざるのみ、倫を知らすと謂つべきなり。

△仰も研究雜誌愛讀の主意たるや、没我して速讀するにあらず、之を玩味し、之を研究し、之れに工夫を凝して讀書すればこそ、妙味も湧くべく、信條の人を縛るが如きも發見し得らる

べく、乃ち月一回の小冊、以て南面百城の主よりも、より多き興味を覺ゆべく候。

△人に人格あり、社會に社會の格ある如く、雜誌には雜誌の格(生は是れを誌格と假に呼ぶ)を有する事と存じ候、野生は投書家諸君に、吾が『みづゑ』の誌格を害する事なきを願ひて、擲筆致候。(完)

## 一生の娛樂

大阪市 富岡 洗帆

僕が繪具で畫を描いた一番最初は、尋常三年生十歳の頃であつた。丸形の十二色入を買つて貰つて、兄さんの軍隊手帳の余白へ、煙草の中から出た草花の畫を描いた、之は今でも残つて居るが、其頃としては一寸奇麗に描いてある。

それから、水彩畫なる名丈けを知つたのは、高等三年の時である。大下先生の水彩畫が少年世界へ出て居た時であるが、決して其の如何なる物であるかは知らなかつた(今でも知らぬが)、只「繪具ばかりで書く繪だ」と、之丈は知つて居たが、英語など知らないので、展覽會へ大下先生の春の川を摸寫して出した時も原畫通り菱形の中にT.Oを書き付けてをいた位である。今は多少の美術書も見、又『みづゑ』等に依つて其一般を知り、又は洋畫展覽會などを見て大に興味を増し、煙草や酒や他のことに趣味を傾たず、之を以て一生の娛樂とする考である。

\*

\*

\*

\*